

土佐のわらべ

第415号《第437回（2016. 5. 12） 子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加3人

『イーダ 美しい化石になった小さなサルのお話』

ヨルン・フルム、トルシュタイン・ヘレヴェ／文 エステル・ヴァン・フルセン／絵
河野礼子／監修 遠藤ゆかり／訳 創元社

本書のタイトルにもなっている「イーダ」は実在する化石で、4700万年前のもので、胃の内容物まで残っている珍しいもので、ノルウェーのオスロ自然史博物館が所蔵していますが、日本でも2015年に国立科学博物館で開催された「生命大躍進展」で実物が展示されました。

本書の前半は物語で発掘後の研究成果とフィクションを交え、イーダの生涯をよみやすくまとめています。また、科学イラストレーターであるエステル・ヴァン・フルセンさんのイラストはごまかしのない写実力で、細部まで見入ってしまう美しさであり、それも本書の魅力となっています。

後半ではイーダが生きた時代の解説や、発掘の過程、そして博物館で展示されるまでが描かれています。また詳細な解説となっているので情報量が多く、全部をきちんと読もうとするとわかりにくいかもしれません。そのこともあって、前半と後半の「違和感」を指摘する感想や「対象年齢がわかりにくい」という指摘もありました。

参加者からは、いろいろな感想が寄せられました。

「4700万年という年月の長さを考えたら、人間ははかないと感じる」「研究者の熱意が伝わってくる。これまで化石の標本はばらばらなものをつなげただけというイメージがあったが、これからはその裏にある物語も想像することになりそうだ」「子どもたちの身近なところに博物館・図書館・美術館があるかないかは大きな違いだと感じた」「物語を読むことで自分には想像力があるほうだと思っていたけれども、化石を見て想像することはなかった。想像力を発揮する方向性が違う人もいるのだと感じた」など、個々の生命のはかなさとそれが化石の状態で現代に受け継がれている奇跡について寄せられたものが多かったと思います。

また本書ではイーダだけではなく、多くの生物が描かれています。そのそれぞれに思いをはせるとき、さらに違う発見があることに触れたものも印象に残りました。そして、参加されたみなさんの多くが「読む前とは少し変わった視点を得た自分」について語られていました。今回の読書会はそこが増幅された印象があり、誰かと本について語る面白さを実感した会となりました。

(A.M)